人はなぜ踊り続けるのか
Why do they continue to dance？

1K08A233-1　　山田　龍志
指導教員　　主査 正木宏明 先生　　副査 杉山千鶴 先生

【目的】

新学習指導要領による義務教育におけるダンスの必修化や、近年のフラダンス、ストリートダンスの流行をみるかぎり、日本人にとって舞踊やダンスという言葉は身近なものになってきていると言える。しかし、コンテンポラリー・ダンスと呼ばれるジャンルについてはまだまだ一般的ではないと言える。

それでもコンテンポラリー・ダンスを続ける人がいることも確かな事実である。それではなぜその人たちは踊り続けるのか。スポーツそのものに関する動機づけの先行研究は多く見られるが、ダンスに焦点を当てたものは少ない。そこで本研究では、インタビューを通して、人はなぜ踊り続けるのかを考察した。

【方法】

大学在学中にダンスサークルに所属し、学部卒業後もダンス活動を続けるAさんとBさんに60分～90分のインタビューを行なった。なお、二人が所属していたサークルはモダンダンス、コンテンポラリー・ダンスと呼ばれるジャンルに相当した。

Aさんは幼い頃からダンサーとして厳しいトレーニングを積み、今やダンスが生活の一部になっていた。一方のBさんは大学入学後からダンスを始め、社会人になっても趣味としてコンテンポラリー・ダンスを踊り続けていた。このように二人はダンスとの関わり方、また生活におけるダンスの重要性が異なっているので、比較対照が可能であり、本研究の目的とする、なぜコンテンポラリー・ダンスを踊り続けるのかを考察できるのではないかと考え、この二人をインタビューの対象とした。

【結果及び考察】

Aさんはダンスの創作段階、振付や構成に自分の世界を自由に作り出すという部分に魅力を感じていることがわかった。これはマズローの欲求５段階説に当てはめると、自己実現欲求によるものであると考えられる。また他人の作品に出演する際には、もらった振付を自分なりに解釈して良い結果を出せたときが楽しいと話した。また、Aさんはコンテンポラリー・ダンスの振付の自由度の高さに惹かれていることもわかった。そして、Aさんは動きの自由度が高いということを＜自由度が高いが故になんでもできなきゃいけない＞ものとして捉えていた。また、Aさんは国内でのコンテンポラリー・ダンスの観客層の狭さを指摘し、一般の人たちにもコンテンポラリー･ダンスを観てもらえるようにしたいと話した。

Bさんは趣味として舞台の機会があるから踊り続けているだけであり、機会が無ければ踊らくなる可能性があることがわかった。そして、Bさんは集団で協同して舞台を成し遂げるということに楽しさを感じていることがわかった。これは親和動機による動機づけが高いためだと考えられる。また、Bさんもコンテンポラリー・ダンスの魅力を動きの自由度の高さだと話した。しかし、Bさんの考える自由度の高さとは、訓練の積み重ねによるハイレベルな技術を要求されず、いかなる身体でも受容されるという意味であった。また、Bさんは日本ではコンテンポラリー・ダンスを続けられる環境が整っていないと感じ、その環境が変わることを望んでいた。さらに、コンテンポラリー・ダンサーがよりダンスで稼げる仕組みができることも望んでいた。

【結論】

Aさんと Bさん二人へのインタビュー調査から、様々な相違点があることがわかった。しかし二人とも内発的動機づけからダンス活動を続けていることは明らかであった。ただし、二人の内発的動機づけを高めるものは、それぞれ異なっていることもわかった。

二人ともコンテンポラリー・ダンスの魅力を動きの自由度の高さであると話した。しかし、二人の自由度の高さに対する考え方は異なっていた。

また、二人とも国内のコンテンポラリー・ダンスの認知度や市場規模など、自身がダンス活動をする上での現状に課題を感じていることもわかった。

以上のことから､以下の可能性が指摘できた。１、罰や報酬などの外発的動機づけではなく、創作や他者との交流など、内発的動機づけによって人は踊り続けるのではないだろうか。２、コンテンポラリー・ダンスにおいてはその自由度の高さに惹かれて踊り続けるのではないだろうか。３、国内のコンテンポラリー・ダンスの課題が解決されれば、よりダンス活動を行う人が増えるのではないだろうか。